

大学生の質問・発言行動と恥への対処行動との関連

川崎直樹*

問題と目的

大学での講義や演習などにおいて、自身にとって不明な点を質問したり、自身の意見を適切に表明したりすることは、講義の成果をより大きくする望ましい行動であるとされる(秋田, 1995; 藤井・山口, 2003; 武藤・久保・大嶋, 1980)。しかし日本の大学生は、質問行動・発言行動は少ないことが指摘されており(武藤ら, 1980; 祐宗, 1999)、質問や発言を促進・抑制する要因についての議論がしばしばなされている。

大学生の質問・発言行動に関連する要因

無藤ら(1980)は、大学生の質問行動に寄与する要因について包括的に検討し、質問の情動的機能をよく理解していること、相手によい印象を持たれようとする、調和を重んじる、社会規範と自己の規範の差を認識していること、シャイであることなどが寄与していることを示している。秋田(1995)は、“つまらない質問で馬鹿だと思われたくない”、“目立ちたくない”といった理由が、講義に関する質問への抵抗感と関連することを示している。藤井・山口(2003)は、授業中に質問をする群より授業後に質問をする群が「他者のまなざしを気にかける」傾向が高

いことなどを示している。北川(2000)は、大学生の発言のしやすさは、“少しくらい間違っている、人前で発言できる”といった発言への自信と最も関連が強いことを示している。祐宗, 無藤, Shwalb, Shwalb, 仲野(1994)においては、大学生が質問をしない理由で最も多いものは“恥ずかしい”という理由であることが報告されている。

これらの先行研究から、大学生の質問・発言行動の生成過程には、個人的・社会的要因が様々に関わっていることが明らかにされている。その中でも特に、無藤ら(1980)の“シャイ”や、秋田(1995)での“馬鹿だと思われたくない”、藤井・山口(2003)の“他者のまなざしを気にかける”、北川(2000)の“間違っているでも発言できる”、祐宗ら(1994)の“恥ずかしい”といった要素はいずれも、他者からの否定的評価を受け、“恥をかく”ことの問題を反映していると捉えることができる。つまり、大学生の質問・発言行動には、恥の感情過程が密接に関わっていることが示唆されているのである。

恥の問題と大学生の質問・発言行動

青年期は、自己意識の高まりとともに、新たな自己の姿と頻繁に直面する時期である(Harter, 2003)。特に大学生は、中学・高

*北翔大学人間福祉学部福祉心理学科

キーワード：質問行動, 発言行動, 恥, 対処, 大学生

校までとは異なる学習形式や、自由で多様な人間関係など、新しい社会的体験をすることが多く、技能や知識が不足している自己の姿に直面することが少なくないと考えられる。そうした自己の否定的側面との直面は、自己の改善点を知るという点で、学業的・心理的成長の礎にもなりうる (Dweck, Higgins, & Grant-Pillow, 2003) が、同時に恥という不快で耐えがたい体験にもつながりうる (Tracy & Robins, 2004)。

この不快な恥感情に対する反応の取られ方は多様であり、場面の回避、弁解、反動的な怒りなど、様々な種類の対処行動が取られるとされている (Elison, Lennon, & Pulos, 2006; 樋口, 2004; 菅原, 1998)。特に恥を喚起した場面を回避したり、恥の体験そのものを否認するなどの不適切な対処が行われた場合、一次的には感情の安定が得られるという利点もあるが、一方で成長の機会を失っているという点で損失も大きいと考えられる。

上述のように、大学生にとって質問や発言をするという行動は、学業面では利益の多い行動であるが、自らの技能や知識の不足が露呈する可能性を伴うものである。したがって質問・発言は恥という不快な感情体験をする危険性のある行動であると言える。しかし実際には、質問・発言を適切に行っている者も多く存在しており、彼らはそうした恥にまつわる体験を適切に処理していると考えられる。つまり、恥感情が喚起した状況においても適切な対処行動をとることができる傾向が、質問や発言行動の促進につながりうると考えられるのである。そこで本研究では、この恥への対処行動と質問・発言行動との関連に焦点

をあて、検討を行うこととする。

恥の対処過程

恥 (shame) という概念は、心理学において非常に頻繁に議論されているテーマでありながら (レビューとして, Tangney, 2003; Tracy & Robins, 2004; 菅原, 1998), その対処過程に関する体系的な研究はそれほど多くはない。樋口 (2004) のレビューによれば, Cupach & Metts (1992) などによって対処行動の分類や状況による対処の差が検討されている。これらを受けて樋口は対処行動を11種に整理し, それぞれの用いられ方と場面や情緒との関連の検討を行っている。ただし, 樋口の研究は, 場面間での対処行動の差を検討することに主眼を置いており, 恥の対処行動の取り方の個人差に注目した検討はなされていない。

一方近年では, Elison ら (Elison, et al., 2006; Elison, Pulos, Lennon, 2006) が, 恥に対する対処行動を4種に分類して測定する compass of shame scale を開発し, 様々な知見を蓄積している。この尺度は, Nathanson (1992) の恥の羅針盤 (compass of shame) モデルをもとに構成されており, 喚起された恥の扱い方として自己非難・他者非難・回避・撤退の4種の対処の用いられやすさが測定されるものである。信頼性・妥当性の検討も重ねられ, 有用性の高い尺度であると言える。ただし, 樋口の視点に比して, 対処行動を4種に限定しているという点で網羅性には制限があると言えよう。

本研究の目的

以上をふまえ本研究では, 恥への対処行動と質問・発言行動との関連を探索的に検討す

ることを目的とする。なお、探索的な検討が目的であるため、恥への対処行動の測定には、多様な対処行動を簡便かつ幅広く測定できる樋口（2004）の手法を用いることとする。

方 法

調査時期

2008年1月中旬に調査を実施した。

調査対象

北海道内の私立大学の学生114名（男性31名、女性82名、不明1名）を対象とした。平均年齢は19.89歳（ $SD = 1.03$ ）であった。

調査手続き

講義時間後に質問紙への回答を依頼し、一斉配布・回収した。その際、回答は匿名である点、回答は義務では無い点、回答を拒否した場合でも不利益が無い点を口頭及びフェイスシートにて教示した。その上で、フェイスシート上にて回答に同意するかを尋ねた。

調査内容

(1)恥への対処行動：樋口（2004）における恥への対処行動の測定法に基づき、恥感情を喚起する場面の想定を求めた上で、その場面での対処行動11種それぞれの実行可能性を尋ねた。本研究では、自らの劣位性が公衆の面前で露呈する公恥場面（“授業中に自分のレポートが、悪い見本として名指しで指摘されている時”）での対処行動を分析対象とした。なお樋口（2004）においては、各対処行動の使用可能性を“まったく使用しない／この状況とは関係がない（1点）”から“非常によく使用する（4点）”の4件法で回答を求めている。しかし本研究では、文意を理解しやすくするため“使用する”という表現を“行う”に改め、回答の分散を大きくするために

4件法から6件法に変更した。“まったく行わない”という選択肢には、選択肢文の意味の直感的な理解しやすさのため1点ではなく0点をあてた。頻度を表す表現も若干変更した。また本研究で用いる恥場面は想定上のものであるため、“この状況とは関係ない”という選択肢上の記述は必要ないと判断し削除した。最終的には各対処行動の実行可能性を“まったく行わない（0点）”，“めったに行わない（1点）”，“まれに行う（2点）”，“ときどき行う（3点）”，“よく行う（4点）”，“いつも行う（5点）”の6件法で尋ねた。

(2)質問・発言行動：藤井・山口（2003）や秋田（1995）を参考にし、Table1に示されている6項目を独自に設定した。“まったくしない（0点）”，“めったにしない（1点）”，“たまにする（2点）”，“よくする（3点）”，“ほとんどいつもする（4点）”の5件法で回答を求めた。

結 果

恥への対処行動の測定項目の検討

恥への対処行動の各測定項目の平均値及び標準偏差を算出し、Table 1に示した。攻撃の項目の分布のみ、低い方へ偏った分布が見られ、攻撃の対処行動が比較的にとられにくいものであることが示された。

恥の対処行動を規定する基本的次元を探索するため、全11項目に対して因子分析を行った。その結果、固有値の推移等の検討により2因子が抽出された。両因子への負荷量の低かった項目8客観的行動（因子負荷量.24と.16）を除いて再度分析を行い、最終的にはTable1に示した結果が得られた。第1因

Table 1 恥への対処行動の各項目の基礎統計量と因子分析結果 (N=114)^a

	M	SD	因子負荷量 ^b		
			F1	F2	h ²
1. 内的状況の報告:個人の情緒的・心理的な内的状態の報告 例:自分が感じていることを口に出す	2.51	1.45	-.04	.58	.32
2. 修復:恥ずかしさが生じる以前の状態に,事態を復元しようとする行為 例:恥ずかしさを引き起こした原因を取り除く	2.14	1.23	.22	.43	.32
3. 謝罪:自分の非を素直に受容する言語的行動 例:「すみませんでした」と謝る	2.82	1.60	-.13	.46	.17
4. ユーモア:ジョークやユーモアを用いる行為 例:ジョークを言って笑いをとる	2.46	1.74	-.15	.56	.25
5. 無視:恥ずかしさを引き起こした行為や事態をそのまま放置 例:なにごとにもなかったかのようにふるまう	2.83	1.39	.58	-.32	.27
6. 弁解:自分の責任を否定する言語的行動 例:「私にはなんの責任もない」と述べる	1.42	1.27	.76	-.01	.57
7. 攻撃:言語的・物理的に他者を攻撃する行為 例:相手や周りの人に対して攻撃する	1.17	1.34	.67	-.03	.43
8. 客観的行動:笑い・微笑・沈黙・絶叫等の客観的行動 例:笑ってごまかす	3.22	1.42	-	-	-
9. 逃走:その場面からの物理的な移動 例:その場を離れる	1.75	1.62	.61	.00	.38
10. 正当化:自分の責任は認めるが,それが必ずしも悪いことではないと主張する言語的行動 例:「まずいことは何もない」と主張する	1.75	1.46	.55	.26	.50
11. 事実の報告:起こった事実の単純な報告 例:起こったことをそのまま口に出す	2.53	1.42	.10	.69	.55

a) 因子分析は最尤法,プロマックス回転により行った。

b) ボールド体は.40以上の負荷量を示す。項目8は第1回目の因子分析により除外された。

子には,弁解,攻撃,逃走,無視,正当化の項目が順に高い負荷を示しており,他者に露呈した否定的な自己情報の存在を防衛的に拒絶・否認して恥を即座に低減させようとする対処の仕方を反映していると考えられる。そこで第1因子は“防衛的対処”と命名した。第2因子には,事実の報告,内的状況の報告,ユーモア,謝罪,修復といった項目が負荷を示し,恥の感情に耐えて自身の非を率直に受

け入れ,建設的に対処しようとしている行動傾向が反映されている。そこで第2因子は“受容的対処”と命名した。両因子の因子間相関は $r=.46$ であり,恥喚起事態に対して何らかの行動をとろうとする点では共通性もあることが示唆された。この分析をもとに,各因子に負荷の高かった項目の評定合計を,それぞれ防衛的対処及び受容的対処の指標とした。

質問・発言行動測定項目の検討

質問・発言行動の測定項目の平均値及び標準偏差を Table 2 に示した。全体的に 2 点を下回る平均値であり、質問・発言行動が大学生にとって“たまにする”もしくは“めったにしない”行動であることが示された。ただし、友人への質問を表す項目 6 は、授業外でも可能な抵抗の低い行動であるため、他の項目よりも平均値が高かったと考えられる。

この全 6 項目に対して、因子分析を行い固有値の推移を検討したところ、1 因子解が妥当であると考えられた。この 1 因子に対する負荷量が低い値を示した項目 6（因子負荷量.29）を除いて再度分析を行ったところ、Table 2 に示したような結果が得られた。質

問と発言は異なる種類の行動であるとも考えられたが、大学生にとっては 1 つの因子によって説明される行動であることが示された。この結果をもとに、全 5 項目の合計点を質問・発言行動の指標とすることとした。

恥への対処行動と質問・発言行動との関連

恥への対処 2 種と質問・発言行動との相関係数を算出し、Table 3 に示した。なお、恥への対処 2 種の間には相関が見られるため、相互に統制した偏相関係数も算出した。その結果、恥への受容的対処と質問・発言行動の間に有意な正の相関が見られ ($r = .30, p < .01$)、恥を感じる状況で受容的で誠実な対処を取るほど、質問・発言行動が多いことが明らかになった。また特に偏相関分析において、恥へ

Table 2 質問・発言行動の各項目の基礎統計量と因子分析結果 (N=114)^a

			因子	
	M	SD	負荷量 ^b	h^2
1. 講義中、わからないことがあったら教員に質問に行く	1.18	0.93	.63	.39
2. 演習や実習で、うまくできないことは先生に相談する	1.55	1.12	.66	.43
3. 講義時間でのミーティングでは自分の考えを言う	1.72	1.08	.92	.85
4. 講義の中で集団で作業をするときには積極的に活動する	1.77	1.13	.81	.66
5. 授業で発言が求められる場面では、自分の意見を言う	1.99	1.14	.71	.50
6. 授業の話がわからなかったとき、友達にそのことを聞く	3.05	0.91	-	-

a) 因子分析は最尤法により行った。b) 項目 6 は第 1 回目の因子分析により除外された。

Table 3 恥への対処行動と質問・発言行動の関連 (N=114)

	M	SD	相関係数 ^a	
			1	2
1 恥への防衛的対処	8.93	5.04	-	
2 恥への受容的対処	12.46	4.90	.31**	-
3 質問・発言行動	8.22	4.37	-.10 (-.21*)	.30** (.35**)

a) 括弧内は 2 つの恥への対処行動を相互に統制した偏相関係数である。
** $p < .01$, * $p < .05$

の防衛的対処と質問・発言行動との間に負の関連が見られた ($r = -.21, p < .05$)。恥を感じる状況で防衛的・拒絶的な対処をとるほど、質問・発言行動がとられにくいことが明らかになった。

より詳細な検討のため、対処行動の各項目と質問・発言行動との相関係数を算出した (Table 4)。その結果、特に防衛的対処の中でも無視と逃走が負の関連を示し、反対に受容的対処の中の事実の報告とユーモアが質問・発言行動と正の関連を示した。これらの対処が質問・発言行動に特徴的に関わることが明らかとなった。

Table 4 恥への対処行動の各項目と質問・発言行動の関連 (N=114)

	<i>r</i>
恥への防衛的対処	
11 事実の報告	.28**
1 内的状況の報告	.14
4 ユーモア	.32**
3 謝罪	.14
2 修復	.06
恥への受容的対処	
6 弁解	.05
7 攻撃	.01
9 逃走	-.26**
5 無視	-.20*
10 正当化	.08

** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

本研究の結果からは、恥への受容的な対処をとる者ほど質問・発言行動が多く、恥への防衛的対処をとる者ほど質問・発言行動が少ないことが示された。恥感情が喚起された状況においても、恥の体験を避けるために事態

の無視や逃走をもくろむのではなく、ユーモアなどを交えながら自身に起きていることを他者や観衆に向けて言語化して受け入れていく姿勢が、講義等への積極的な質問や発言へとつながっていくと考えられる。

恥への対処行動が質問・発言行動と関わる過程について

想定した場面のように、自己の否定的情報が新たに露見した場面においても、一時的に喚起された恥の感情に耐えて、“不足な点を指摘された”などと自身の状況を他者や観衆のいる場で言語化することは、その否定的な情報を含んだ新しい自己概念を再構築する上でも有効と考えられる (Higgins, 2005)。否定的な情報を適度に含んだ自己概念が構築されることで、同様の否定的自己情報に再度接する機会があってもそれを脅威と感じずにすみ、安定した心理状態で質問や発言などの適切なふるまいを取りやすくなるとも考えられる。特にそうした体験にユーモアを交えることで、本人の苦痛が低減され、他者にとっても受け入れやすいものとなり (Lefcourt, 2005)、心理的安定につながる効果があるとも考えられる。

反対に、恥の感情を一時的に避けるために事態の無視や逃避などの防衛的対処を行った場合、否定的な自己情報が自己概念に十分に統合されず、以後同様の否定的な自己情報に接した場合にもそれを脅威と感じ続けることになるとも考えられる。つまり恥への防衛的対処は、自己概念の更新を妨げる方略であり、そのため同様の事態に対する順応や適応を妨げる側面があると考えられる。このことから、防衛的対処をとる者ほど、否定的自己情報の露呈の可能性のある質問や発言行動に対して

抵抗感や脅威感は強く、それらの行動が取られづらいと考えられるのである。

ま と め

以上のように、恥への対処の過程は、大学生の質問や発言行動と密接に関わっていることが示された。大学生に対して質問や発言の少なさについて指摘・指導する際にも、単に“質問や発言をせよ”とその場での行動のみを指示するのではなく、恥を体験しそうな場面での、言語化やユーモアを含めた受容的で率直な対処を促すことが有効となりうると考えられる。質問や発言に際して恥の感情の喚起されることは自然であるという認識のもと、それから逃げずに、状況そのものを言語化するなどして恥の体験そのものを受け入れていくことを援助することが有効と考えられる。講義や演習の場面に限らず、広く日常生活も含めた場面での長期的な関わりが重要であることも示唆されていると言えよう。

なお、本研究の今後の課題としては、サンプル数の拡充や信頼性のある尺度の使用による結果の再検証などがあげられる。特に後者については、Elison et al. (2006) など、各対処カテゴリを複数項目によって測定する手法による追試的検討が有効であろう。また、質問・発言行動の生起プロセスを下位プロセスに分けた検討や、状況要因なども絡めた検討も有効となるであろう。

引用文献

- 秋田喜代美 (1995). 心理学に対する授業観と質問行動：一般教育課程と心理学専攻の比較検討 立教大学心理学科研究年報, 38, 25-38.
- Cupach, W.R., & Metts, S.(1992). The effects of type of predicament and embarrassment on remedial responses to embarrassing situations. *Communication Quaterly*, 40, 149-161.
- Dweck, C. S, Higgins, E. T, & Grant-Pillow, H.(2003). Self-systems give unique meaning to self variables. In M.R. Leary, & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of Self and Identity*. New York : Guilford Press. pp. 239-252.
- Elison, J., Lennon, R., & Pulos, S.(2006). Investigating the compass of shame : The development of the compass of shame scale. *Social Behavior and Personality*, 34, 221-238.
- Elison, J., Pulos, S., & Lennon, R.(2006). Shame-focused coping : An empirical study of the compass of shame. *Social Behavior and Personality*, 34, 161-168.
- 藤井利江・山口裕幸 (2003). 大学生の授業中の質問行動に関する研究：学生はなぜ授業中に質問しないのか？ 九州大学心理学研究, 4, 135-148.
- Harter, S.(2003). The development of self-representation during childhood and adolescence. In M.R. Leary, & J.P. Tangney (Eds), *Handbook of Self and Identity*. New York : Guilford Press. pp. 610-642.
- Higgins, R. L.(2002). Reality negotiation. In C. R. Snyder, & S. J. Lopez (Eds.), *Handbook of Positive Psychology*.

New York : Oxford University Press.
pp. 351-365.

chological Inquiry, 15, 103-125.

樋口匡貴 (2004). 恥の発生 - 対処過程に関する社会心理学的研究 北大路書房

付記

本研究は平成19年度北翔大学人間福祉学部における学部教育研究促進費の助成を受けた。

北川智之 (2000). 大学生の発言不安と自己効力感について 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 405.

Lefcourt, H.M.(2002). Humor. In C.R. Snyder, & S.J.Lopez (Eds.), *Handbook of Positive Psychology*. New York : Oxford University Press. pp. 629-631.

無藤 隆・久保ゆかり・大嶋百合子 (1980). 学生はなぜ質問をしないのか? 心理学評論, 23, 71-88.

Nathanson,D.L.(1992). *Shame and Pride : Affect, Sex, and the Birth of the Self*. New York : Norton.

菅原健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか - 羞恥と自己イメージの社会心理学サイエンス社

祐宗省三 (1999). 大学・短大の授業における無質問行動をめぐって 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 40.

祐宗省三・無藤 隆・Shwalb,D. ・Shwalb, B. ・仲野好重 (1994). 授業中における大学生の無質問行動をめぐる教育心理学諸問題 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 34-35.

Tangney,J.P.(2003). Self-relevant emotions. In M.R.Leary, & J.P.Tangney (Eds.), *Handbook of Self and Identity*. New York : Guilford Press. pp. 384-400.

Tracy, J.L., & Robins, R.W. (2004). Putting the self into self-conscious emotions : A theoretical model. *Psy-*

Questioning and speaking behaviors and shame-coping styles
of undergraduate students

Naoki KAWASAKI

ABSTRACT

Relationship of shame-coping styles to questioning and speaking behaviors among undergraduate students was investigated. Undergraduate students (n=114) completed a questionnaire measuring 11 shame-coping styles and questioning and speaking behaviors. Factor analysis identified two factors in the shame-coping styles : defensive coping and accepting coping. Questioning and speaking behaviors were found to correlate negatively with defensive coping and correlate positively with accepting coping. These findings suggest that increased accepting coping of shame experiences is related to questioning and speaking behaviors.

Key words : questioning behavior, speaking behavior, shame, coping, undergraduates.